
行き先はひとつ

青野木愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

行き先はひとつ

【Nコード】

N0105V

【作者名】

青野木愛

【あらすじ】

やっと幸せになれる。そう思っていた矢先に新一は蘭の元を去ってしまった。これをきっかけに蘭の心の歯車は狂い出す。抑え切れない感情に触発され、周りの仲間にも害を与えてしまうほど悪化し、ついには……………！？

——「工藤新一？ああ…いたわね。そんな奴。」——

新一の命日に蘭から突然発せられた言葉。一同は愕然とした。

仲間を酷く傷付けてしまう蘭。それでも壊れ行く蘭の心を何とか取り戻そうとする一同だが…。
そんな時思いがけない出来事に直面する。

新一死ネタ。苦手な方はb a c kを進めます。

蘭は暴れたり暴力奮ったりはしませんが…蘭キャラ崩壊↑一応言うておきますが、蘭が嫌いなわけではありません（TOT）
名探偵コナンのキャラに嫌いなキャラは一切いません。皆好きです。
それでは…よろしくです

プロローグ（前書き）

展開遅くなるかも…まだよく分かりませんが…。

新連載始めました。

よろしくお願いします

プロローグ

― 出会いは偶然。別れは必然。 ―

こつこつ言葉をよく耳にするものだ。一見単純に見えてしまつこの言葉。しかし別の言い方で表現すると意味は深刻化する。

― 喜びは偶然。悲しみは必然。 ―

そう、喜びは自分の努力次第で左右することが出来るけれど、悲しみは誰にだって訪れるもので、左右することは出来ない。

傍にいた人間、皆に死期は来る。そうならば“悲しみ”は付き物だ。これは必然。どんなに足掻いても逃れられない真実。

でも…私達の“別れ”は早過ぎたんだ。

このままずっと幸せになれる。そう思い込んでいた…

そう信じていたのに…

もうあの頃のような無邪気な二人には二度と戻れない。

あなたのことが誰よりも大好きだったから、心の傷は深くなる。

時々、感情を持って生まれて来たことを憂鬱にさえ思ってしまった。

でももう遅い。何を思っても、全てが遅い。私の中の歯車は狂い出してしまった。そして、何もかもが嫌で周りの人にまで害を及ぼしてしまうほど悪化していった。

そして私はあなたの存在までも……………。

全ての発端は3ヶ月ぐらい前の出来事だった。

プロローグ（後書き）

GARNET CROWの歌詞をちょこつと使わせてもらいました。

今回は蘭視点。

次回からはしばらく回想モードになりますが、コナン視点とかも入れていますかと思っています。

早く1作品目を終わらして、…3作品目の短編集は気が向いた時に執筆して、…そして4作品目と5作品目であるこの小説を、頑張つて書いていきたいと思っています。2作品目は訳ありでしばらく放置しますが、ご了承下さいm（＜|＞）m

では 更新不定期ですが次回もよろしくお願いします

1・別れと約束（前書き）

重要じゃないシーンなのにちょっと長くなりました…；

変更があります。

『プロローグ』で“3週間前”と書きましたが“3ヶ月前”にします。

1・別れと約束

最近、コナン君の様子がおかしい。いつも冷静なのにここ最近落ち着きがない。そして時々浮かべる悲しげな表情。

どうしてそんな顔してるの？何か隠し事でもしてるの？

そう問おうとした時、タイミング良くコナン君の口から発せられた言葉に私は驚愕した。

―僕、明日、両親の都合で海外に行くことになったの。だからもう会えないと思う―

そう言ったコナン君の顔がすごく切なくて申し訳なさそうにしている。

私の気持ちははち切れそうになった。

弟のように可愛がっていたコナン君が…
泣いてばかりの私を励ましてくれたコナン君が…
勇気があつて頭が良くてカッコイイ、まるで新一のようなコナン君が…
いなくなってしまうなんて…

コナン「蘭姉ちゃん…泣いてるの？」

気づけば流していた涙。慌てて手で拭い、無理矢理笑顔で答えた。

蘭「ゴメンね。ちょっと悲しかっただけ。泣いてもどうしようもないことなのに…不安にさせちゃって…本当にゴメン。」

コナン君に会える時間が限られているのなら…それまで笑顔でいたい。その半面、辛い気持ちが増すのは分かっていることだけど。そう思っているのに体はいうことをきかない。

私は迷惑かけてるだけだよな？

コナン「謝るのは僕の方。いつも心配かけて泣かせちゃって…」

蘭「うつん…」

コナン「あのさ…約束してほしいことがあるの」

蘭「何？」

コナン「もう泣かないで。すぐに幸せが来るはずだから…本当の幸せね」

低いトーンのコナン君の声は子供とは思えないほどの威圧感がある。

蘭「どっぴろっぴとっ」

コナン「そのうち分かんと思うよ。」

そう言うコナン君の姿を私の瞳は江戸川コナンとしてではなく工藤新一として映し出していた。

私は目の前の小さな、でも遅い子供を思わず抱きしめてしまった。

蘭「約束するよ。泣かないって。だからコナン君も約束して。向こうに行ってもたまには連絡してね。」

そうじゃないと、私、壊れちゃう。

コナン「うん…約束するよ…それと空港まで見送りに来なくていいから。」

蘭「どうして？」

コナン「だって寂しくなっちゃうじゃない。皆の姿見てたらさ。」

蘭「うん。分かった。それよりこのこと元太君達に言ったの？」

コナン「うん。同じように見送りには来なくていいって言ったよ。」

顔を曇らせ少し俯き加減でコナン君はそう言った。

コナン君だって皆との別れ、悲しいよね。なのに私だけ泣いちゃって…

決めた。

明日コナン君がいなくなる時、探偵事務所の前でとびきりの笑顔で見送ってあげよう。

コナン君を安心させてあげるためにも。

それと私のこの厄介な感情を抑えるためにも。

~~~~~

次の日の朝、コナン君は母親、江戸川文代に連れられて、探偵事務所をあとにしようとしていた。

蘭「約束ちゃんと守ってね。」

遠ざかっていく小さな背中に向かって、私は大声でそう叫んだ。

コナン「蘭姉ちゃんもだよ」

蘭「うん。じゃあ元気でね。病気とかには気をつけてね。バイバイ」  
「！」

大きく手を振りながら、込み上げてくる感情を抑えるため、無理矢理笑顔をつくる。

コナン「うん。あのさ…恥ずかしくて最後まで言えなかったけど…僕、蘭姉ちゃんのこと大好きだったよ」

えっ…

一瞬手が止まったかと思うと、頬に一筋の涙が伝った。  
何でだろう。子供に“好き”とたった一言言われたただけなのに。なぜかその響きが嬉しくて辛い。

それでもなお、私は笑顔で手を振り続けた。

蘭「私も…コナン君のこと好きだったよ」

コナン君の姿が見えなくなると、私は崩れるようにその場に座り込んだ。抑え切れなくなった嗚咽と涙が探偵事務所の前に悲しくこたえまする。

嘘だ。私は嘘をついた。

約束したばかりなのに…  
でも…今日ぐらい許してね？

私にとってコナン君は本当大きな存在だったんだと改めて思った。

本当に行っちゃうんだよね。  
幸せになってね。コナン君。

今までありがとうね…

—バイバイ……—

## 2・苦境ゝ嫌な胸騒ぎゝ（前書き）

今回ちょっと短めです。

急いで執筆したので誤字脱字があるかもしれません。

## 2・苦境く嫌な胸騒ぎ

コナン君がいなくなつて1週間。  
思つたより寂しくて辛い。

新一の時と同じように“コナン君は私の傍にいて当たり前”と思つていたから、実際、押し付けられた現実には過酷なものだった。

だから私は毎日のように、新一とトロピカルランドに行った時に撮つた写真を見ていた。

少しでもこの気持ちを抑えることは出来ないだろうか、と思つて…。

でもそれが逆効果になつていた。

張り裂けそうなこの気持ちに抑えなんか効かない。今にも心が碎けそうになる。

それでも見なくなつてしまふ…厄介な気持ち。

偉大で大事な何かを失ってしまったような喪失感。  
一人きりになってしまったような孤独感。

込み上げてくる想い。

全て“別れ”には付き物で最大の負担となるもの。そんな負担が日  
を重ねることに蓄積していく。

ふう  
…

気づかなかったなあ  
…

コナン君がこんなに私の中で大きな存在だったなんて…

コナン君は弟のように可愛がっていたけど、このモヤモヤした無形の想いは、新一がいなくなったことによる心の穴埋め程度の為に生じた、たわいない感情だと思っていた…

でも今考え直すと、私はきつとコナン君に対して恋愛感情を抱いていたんだなぁと思う。

こんなことに気づかないなんて…ホント私って馬鹿。

新一が言っていたように私は厄介者なんだ。

でもこの厄介な難事件を解決できるのは…新一…いや、コナン君で  
もできたと思う。

自分ではできないから…  
二人以外にはできないから…

お願い…どっちでもいい…この苦境から私を助けだして…

込み上げてくる想いととも、目頭が熱くなる。

ダメ…泣いちゃダメ…

コナン君と約束したんだから…  
堪えて、強くなきゃ…

強くなって…信じなきゃ…

二人を…

そんな時だった。

『ピンポーン』

探偵事務所のチャイムが鳴った。

「はーい…」

こんな時間に一体誰だろ？

事件の依頼かな？

でもお父さん、麻雀に出かけてるから明日にしてみらわないと…。

でも…なんだか嫌な胸騒ぎがする…。

そんなことを思いながら私はそつと3階の自宅のドアを開けた。

「えっ…？」

私の中の何かが崩れた。

שאלה...

## 2・苦境く嫌な胸騒ぎく（後書き）

探偵事務所に誰が来たのか？

わかる方も多いと思いますが…一体誰でしょう？

次回もよろしく願います

### 3 ・幸せ〜見えない魔の手〜（前書き）

なぜかこの小説ばかり投稿してしまう；

不定期ながらの更新ですがよろしく願いますm┐┐m

### 3・幸せに見えない魔の手

蘭「どうして…」

目の前にいるのは新一…  
だけど…

新一「蘭…俺だ。い、いきなり押しつけて…ゴメン…」

蘭「そんなことよりどうして傷だらけなの？」

息が荒く、所々にある傷跡。

新一「た、探偵事務所の前で…怪しい奴を…見つけたんだ。そいつを取り押さえる時に、相手の拳銃で…。逃げられちゃったけどな。全部かすり傷程度だからたいしたことねえよ…」

蘭「取りあえず中に入って。手当てしてあげるから。」

新一「…悪いな…」

蘭「いいのよ。これくらい。」

新一の顔を久しぶりに見たのは嬉しかったけど、こんな傷だらけの姿を見ると、複雑な気持ちになってしまう。

~~~~~

蘭「よし。完了。それよりなんでこっちに帰って来たの？」

私は手当てを終えると疑問に思っていたことを新一に問いかけた。

新一「ああ…前まで手掛けていた事件が片付いたからな。」

蘭「じゃあ…」

新一「ああ。もう俺はどこにもいかねえよ。これからはずっと一緒だ。」

蘭「ホント！良かった〜」

やっと新一が帰ってきたという嬉しさ。さっきまでのことは忘れたかのように私は新一に抱きついた。

蘭「じゃあさ！明日復帰祝いにトロピカルランドにでも行こうよ！園子も誘って！」

新一「いいぜ。（園子も一緒かよ…）」

蘭「じゃあ決まり！」

新一「なあ蘭。しばらくの間、ここにいていいか。例のあいづがまだこの近辺に潜んでるかもしれないからねえから。」

蘭「うん。いいよ。その代わり、無茶しないでね。私、新一に何かあったら…」

新一「ああ。分かったよ。」

新一は優しく、私を包み込むように微笑んでくれた。
嬉しいけど…でもそれを見ると逆に不安が高まる。

ホントに私って厄介者だね。

“この笑みがもう見られなくなってしまうのではないか” そんなことばかり考え、怖れてしまう。

だから私は新一に念を押した。

もうこれまでのような辛い思いしたくないから…。

蘭「絶対だよ。もうどこにもいかないよね？ずっと一緒だよ、私達。」

新一「当たり前だろ。もうどこにもいかないよ。お前を絶対幸せに
してやつから、心配すんな。」

蘭「本当に？」

新一「本当だ。蘭を置いていなくなったりしねえよ。約束する。だから安心しろ！」

蘭「約束破らないでよ。」

新一「ああ。」

信じていいよね？

私達は軽くキスを交わして、照れ臭そうに笑いあっていた。

もつすぐそこに残酷な未来が待ち受けているとも知らずに…。

3 ・幸せ〜見えない魔の手〜（後書き）

ちょっと甘く…したつもりはありませんW↑おいっ

次回…ちょっと話が動く…かも…。

4・惨劇（前書き）

無駄なセリフ入れちゃった…何かもう…ダメだ…;;

妄想だけは立派なんですけどねWWW

今回ちょっと話が動きます。

誤字脱字があるかもしれませんがよろしくです。

4・惨劇

待ち合わせ時間はすでに30分以上過ぎていた。

蘭「園子ゴメン！」

私は新一と一緒に、待ち合わせ場所のトロピカルランド前にいる園子のもとへ慌てて駆け寄った。

園子「おっそ〜い！この園子様を何分待たせたと思ってんのよ！」

蘭「ゴメン園子。」

園子「… たく主役の新一君が遅れるなんて… まったくね…」

新一「しゃ～ねえだろ。蘭の支度が手間取って… なかなか出発できなかったんだよ。」

園子「はは～ん。この園子様を待たせてまで一緒に行きたかったの…」

蘭「べ、別にそういうのじゃないの。だから…その…」

蘭は顔を赤らめながら必死に言い訳を考える。

そんな蘭を横目に園子はさらに言い続ける。

園子「はいはい。どっせ新一君は私のことなんかそっちのけで、蘭のことしか頭にないんだわ。」

新一「ったりめゝだろ。俺が愛してんのは…蘭だけなんだからよ」

その言葉に蘭は顔を真っ赤にした。

園子「おーおー。言うねえ。この男。」

蘭「／／／そんなことより、早く行こうよ。えゝっと…どこから乗ろうかなゝ…」

園子はハァ…と一息つき、さっきとは打って変わって優しい視線を

蘭に向け、「ホント、良かった」と誰にも聞こえないぐらいの音量で呟いた。

苦い経験をした二人は、それと比例する幸せを手に入れることが出来るはず。

神様は辛い思いをした二人を見捨てたりなんかしない…いつでも蘭達のこと見守ってくれてるからさ…

だから…素直になりなよ…お互い。でも新一君は昔に比べるとずいぶん素直になったかな？
でも二人が素直にならないと意味がないのよ。

幸せを用意してくれるのは神様でも、“永遠”を築き上げることが出来るか出来ないかは、あんた達しだいなんだから。

苦い経験をバネに、さらに努力して次の壁を乗り越えれば…もしかしたら蘭達は永遠を越えた幸せを…築き上げることが出来るかもしれない。

他の誰かじゃダメ。蘭達二人じゃないと達成できない夢を私に見せてほしい。

その時はちゃんと私が皆と一緒に盛大に祝福してあげるね。

前を向いて走ればすぐそこにゴールはある…だからちゃんと自分を貫いてほしい。

もう蘭の悲しむ姿は…二度と見たくないから…。

トロピカルランド

空はほんのわずか夕焼け色を帯びていたが、次第に悍ましい紫色へと変化していった。

園子「現在18:30。」

蘭「もうこんな時間か。あとはパレードを見て締めくくろっか。」

園子「そうね。今日は久しぶりに楽しめたわ。特に悪魔の実験室！
超々面白かったね。」

蘭「ええ。あれ、超心臓に悪い」

園子「ホント蘭って怖がりだよね。」

蘭と園子は二人で談笑していた。
しかし、新一は先程から様子が変だ。

その様子に気づいた蘭は新一に声をかけた。

蘭「どうしたの？新一…」

蘭の言葉で我にかえった新一は慌てて笑顔で答えた。

新一「いや。別にどうってことねえよ。ちょっと暑いなあと思っただけ。」

蘭「そう？別に暑くないと思うけど」

—その時—

ドォーン…

鈍い爆発音が鳴り響いた。

それと同時に人々の悲鳴も。

「爆発よ爆発！」

「悪魔の実験室だ！あそこで爆発があつたみてえだぞ！」

人々は口々に叫びながら、逃げ回る。

いきなりの非常事態に混乱している蘭と園子。

そして…逃げ回る人混みの中から、何者かが拳銃で蘭を狙っていたことを新一は見逃さなかった。

新一「危ない！らん！らん！」

パシュ…パシュ、パシュ

新一の叫び声とともに、3発の銃声が聞こえた。

ガラスのように飛び散る緋色の血。

園子「蘭！新一君！」

客達の悲鳴はさらに声量を増す。

ただ、園子は人の波にのまれながらも、その客達の悲鳴を掻き消すぐらいの音量で二人の名前をひたすら呼び続けた。

——二人の幸せを…見失いたくなかったから…——

4・惨劇（後書き）

蘭ちゃんが言ってた「超々心臓に悪い」っていうセリフはアニメコナンの1話で光彦が言っていましたWWW

『悪魔の実験室』は劇場版「瞳の中の暗殺者」で園子が言ってたので使わせてもらいました。

ってか園子ってこういうキャラだっけ？何かちよつと違うような…；でも園子だから言えることってあると思うんですよ。

普段は能天気、楽天家な感じがするんですが、友達思いでたまに良いこと言ってます。↑戦慄の楽譜とかで…

園子個人的に好きです♪

そういえば8/19の午後9時から金曜ロードショーで『戦慄の楽譜』やるそうですよ。…たぶん…

来週はマジック快斗。

どっちも楽しみですな。

5・理解不能な現実（前書き）

あらずじ通り新一死ネタです。あと残酷な描写も少しあるので注意を。

苦手な方はb a c kして下さい。

新一視点だったり蘭視点だったり三人称だったり、ややこしいと思います。すいませんm（――）m

5・理解不能な現実

園子「蘭！新一君！」

人の波からやつのこと抜け出した園子は、すぐに蘭達のもとへ駆け寄った。

園子「大丈夫！？」

そう呼びかけると蘭はゆっくりと身体を起こした。

蘭「私は大丈夫だよ。それより新一が……」

新一「俺は…大丈夫…だ。早く…ここから避難するぞ…」

新一はふらつきながら立ち上がり、か弱い声でそう言いと、私の手を強く握って走り出した。

園子も二人のあとに続いた。

繋がれた手に生暖かいものを感じる。

—涙—

そう、私は知らないうちに涙を流していた。

どうして…せつかくの新一復帰祝いなのに…今度こそうまくいくと
思ってたのに…

どうしていつもこんな目に遭わなきゃいけないの？

どうしていつもこうなるの？

蘭はそんな気持ちで押し潰されそうだった。

~~~~~

しばらくたって辿り着いたのはトイレの裏。  
隠れるのにはちょうどいい場所だ。

園子「誰も追って来てないし、もう大丈夫そうね……——って新  
一君!？」

新一は膝と右手を地面につき、左手で胸をおさえながら激しい呼吸  
をしていた。

新一は腹部に2発、肩に1発、計3発の銃弾を浴びていた。

傷口からは夥しい量の血が溢れ出している。

そんな新一に園子と蘭は止まることのない涙を流しながら、必死に呼びかける。

蘭「しっかりして新一!!」

園子「新一君!」

新一「…くっ…う…——っ!？」

突然、心臓が激しく波打った。それと同時に額から汗がいつきに吹き出てくる。

新一（…この感じ…まさか…っ!？）

蘭「新一…どうしたの？汗びっしょりだよ？」

「ダメだ…今…死んじゃ…ダメなんだ。」

目の前にいるんだ。大切な奴が…

幸せにするって…もう、どこにもいかないって…そう約束した奴が…

…だから絶対に…死ぬ訳には…―

そう自分に言い聞かすが、心臓はさらに激しく波打つ。

くそ！くそ！くそ！くそ！

“ドクン” “ドクン”

くっそ~~~~!!!!!!!!

“ドックン”

新一「…う…くっ…ああああああああああ!!!!」

叫び声とともにみるみるうちに縮まっていく身体。

そして、力尽きた獣のように新一は倒れ込み、ぐったりとしてピクリとも動かなくなった。

生身の人間が縮むという奇怪な現象を目の当たりにした園子と蘭は、隠しきれない驚きと哀しみが複雑に絡んだ、そんな表情をしていた。

目の前に映る新一は…新一じゃない…

その姿は紛れもなくコナン君。それ以外の何者でもない。

何が合ったの？

いつたい何が起きたの？

何なのよ。これ。

訳わかんないよ。

夢でも見てるのかな？

蘭は自分の頬を抓る。

痛さを感じたことから、これが夢ではないことを蘭は確信した。  
それと同時に襲いかかる疑問と不安。

夢じゃない…

嘘  
…  
だよ  
ね  
…

嘘  
…

だ  
っ  
た  
ら  
こ  
れ  
は  
現  
実  
？

嘘だつて言つてよ。新一。

口を開いて声を出してよ……そうじゃないと何も聞こえないじゃない  
……新一……っ……

蘭「新一……!!……!!」

蘭の悲痛な叫びだけがその場に轟き渡った。

## 5 ・理解不能な現実（後書き）

不定期ながらの更新ですが、次回もよろしく願います

## 6・故人の行き先は…？（前書き）

あらすじでも書いたように新一死ネタです。

苦手な方はbackして下さい。

急いで執筆したので誤字脱字があるかもしれません。

## 6 故人の行き先は…？

園子「新一君の体が…縮んだ？そんなことって…」

蘭「とにかく早く救急車を…」

蘭は携帯電話に手をかけるが、手が震えていてうまく番号を押せない。

園子「私が電話するから…蘭は止血して」

蘭「ご、ごめん。園子…」

蘭は情けなさを感じながらも園子の言うことに従って、止血を始めた。

どうしても失いたくない。  
新一を助けたい…そんなことをただ一心に思い続けて…。

手が緋色に染まっている。  
手の震えは尋常じゃない。  
それでも出来る限りの力を絞り出した。

止血を終えるとその小さな新一の体をそっと抱き上げた。

顔は青白く、体が冷えている。

早く…

早く救急車来てよ…

早くしないと新一が…

止血しても溢れ出す血。息もほとんどしていない。かなり危険な状態であることは、誰にだってわかるだろう。

蘭は抱きしめる力を強くした。

お願い…もうちょっと待って…

もうちょっとで救急車来るから…だから逝かないで…

自分は何もしてやれない無力な人間……そんなことはわかりきっていることだから、そう願うしかなかった。

まもなくして救急車が到着し、米花総合病院へと向かった。

〳〵米花総合病院〳〵

病院には蘭や園子の他に、小五郎、英理、少年探偵団、博士、哀、そして事件のことを聞き付けた目暮、高木、佐藤も駆け付けていた。

「どうして！どうして！新一が死ななきゃならないの！」

そう叫び、医者につかみかかっているのは蘭だった。

医者を責めても新一はもう二度と戻ってこない。そんなことはわかってる。それでも体が止まらなかった。

「いや、その…運ばれた時からもう手遅れで……」

蘭「そんなはずない！新一は…新一は…助かったはずよ！もっと早く…もっと早く駆け付けてくれたら、助かったはず…っ…！」

園子「蘭。落ち着いて…」

蘭「でも…どうして…どうしてこうなるのよ！…いやあああああ」

泣き崩れる蘭を、園子はそっと包み込むように抱きしめる。

そして目暮警部に視線を移した。

園子「すいません。事件の詳しいことについてはまた後日にしても  
られますか？」

目暮「ああ…こんなことになってしまったからな」

高木「でもまさかあの工藤君がコナン君だったとは…」

佐藤「薄々感づいてはいたけど…」

目暮「しかし…どうして工藤君は小学生の姿になっていたのかね？」

それは誰もが思っていたことだった。

しばらくその場に沈黙が流れたが、博士がそれを破った。

博士「それは私からお話します。」

その言葉で一同は博士に注目した。

博士は組織のことを全て話した。

灰原哀こと宮野志保のことを除いて…

博士の話聞き終わると皆は複雑な表情をしていた。

蘭「そんな…私は新一に騙されてたの？…ずっと辛い思いしてたのに…どうして教えてくれなかったの？こんなに近くにいたのに…」

園子「蘭……」

そんな中、一番複雑な表情をしていたのは哀だった。

自分の犯した罪を全て博士の優しさが覆い隠してくれている。

でもそれでいいのかしら？

皆は博士の話を聞いて、こんなにも悲しみに苦しんでいるのに……。

なのに私だけ……逃げてる。

自分の犯した罪から……苦しみから……逃げてる。

やっぱり言おう。博士が言わないのなら、自らの口でちゃんと偽りのない真実を伝えよう。

どんな風に思われてもいい。  
人殺しだと思われてもいい。

そう思われるのが私の本来の姿だから。

そう全て、A P T X 4 8 6 9 を作り出し、“完璧な解毒剤”が出来たと勘違いして工藤君にその薬を渡した私の責任。

話によると工藤君は撃たれた後まだ意識はあったみたいだが、体が縮み、そのまま動かなくなってしまったようだ。

体が縮まなければ、私がちゃんとした解毒剤を作っていれば、彼は助かったかもしれない。

馬鹿よね、私。

彼を何とか元の体に戻し、蘭さんと早く幸せになってほしいと思って、焦った結果、工藤君を死なせてしまった。

迷惑かけてばかりね。工藤君にも、蘭さんにも。いや、迷惑どころじゃ済まないわよね。

皆はこれからどうなってしまうのか。特に彼女（蘭さん）はどう変わってしまうのか。  
行き先は…一体？

まだわからないことだけど…何か嫌な予感がする。

哀は目の前で泣き崩れる蘭を見つめ、静かに一息ついた。

何がどうあれ、言わなければならない。

哀は覚悟を決めたかのように瞳を鋭くし、口を開いた。

6 故人の行き先は…？（後書き）

まじっく快斗面白かったですね。快斗カッコイイ。

今、快斗にはまっていますV

では、次回もよろしくお願いします

## 7・哀悼〜偽りのない真実〜（前書き）

久しぶり？に長めです。

要らないセリフとか結構あるので、1ページ目と2ページの途中まではそんなに重要ではありません。

誤字、脱字があるかもしれませんがよろしくお願いします。

## 7・哀悼〜偽りのない真実〜

哀「博士……………」

博士「……………なんじゃ？」

哀は博士に真剣な眼差しを向ける。

そんな哀に圧倒されて、博士は思わず視線を逸らした。

哀「…私のことを気遣ってくれてありがとう…でも…ちゃんと  
言ったほうがいいと思うの…」

博士「すまんのう…哀君……………」

哀「謝らないで…これは自分の口で言うべきことだから…」

博士は哀のどこか悲しげな顔を見て、何も言えなくなってしまうた。

哀「皆に聞いてほしいことがあるの。目を逸らさず…聞いてね…多分、受け入れられないと思うけど…」

一同は不安な表情をしていた。

哀「私…江戸川君と同じで、実は小学生じゃない。……組織の一員の化学者だったの。」

歩美「……—あはは…冗談はやめてよ。哀ちゃん…」

しばらく沈黙が流れたが、歩美がぎこちない苦笑いをしながらその沈黙を破った。

哀「冗談なんかじゃないわ。ちゃんと“シェリー”っていうコードネームもあるし、何より私は……………」

歩美「わかってる…哀ちゃんが嘘ついてないことぐらい…わかってるよ…でも…どんなことがあっても哀ちゃんは哀ちゃんだから…だからね…」

——それ以上言ってほしくない——

哀の言葉を遮り、涙を流して震える声でそう言う歩美に、哀は自分のハンカチを渡し、慰めるような優しい声で呟いた。

哀「…ありがとう。貴方のその気持ち、すごく嬉しいわ。でも、江戸川君がこうなった以上、黙っておくわけにはいかないの…言わなきゃならないことだから…。お願い、最後まで聞いてくれるかしら？」

歩美は無言で頷いた。

哀は気を取り直して、話を続けた。

哀「彼の体を小さくした妙薬“APT-X4869”を作ったのも私。

本当は不老不死を目的として作られた薬だったけど、まだ試作段階のその薬を、組織が勝手に人間に投与し始めたのよ。死体から毒が検出されないという代物で、殺人用に使われるようになり、工藤君もその薬の被害者の一人となった…

でも例外があつたの。工藤君は薬の副作用によって身体が縮み、死を免れた……………

A P T X 4 8 6 9 に副作用があるなんてこと、私以外の化学者は知らなかったから…組織との決着が着いたあの日まで、正体がばれずに済んだってわけよ…」

蘭「…そ…んな…」

悲しいからなのか、怒っているからなのか、蘭の声は震えていた。

そんな蘭を横目に佐藤刑事は哀に言った。

佐藤「でも…哀ちゃんまで、なんでそんな小さな体に…」

哀「組織に……お姉ちゃんを殺されたの……」

佐藤「えっ」

哀「それで私は組織に、お姉ちゃんを殺した理由を教えてもらうまで薬の研究を中断する、という対抗手段をとった。

組織に歯向かった私は、当然処刑されることが決まった。その時が来るまでガス室に拘束され、どうせ殺されるならと思って飲んだのが、工藤君が飲まされたのと同じ“APT-X4869”。  
幸か不幸か副作用で身体が縮み、この私に小さな脱出ルートを与えてくれた……。それで私は組織を抜け出すことができたのよ。」

皆の顔はさらに複雑になっていた。

哀はそんな皆をただじつと見つめる。

佐藤「A P T X 4 8 6 9 … かあ。その薬のこと詳しく聞かせてくれる？」

哀「えっ… ああ… 興味あるんなら教えてあげてもいいけど… 何の役にも立たないと思うわよ？…」

佐藤「そんな危険な薬があるなら、知っておいたほうがいいかなって思っ  
てね…」

哀「確かにそうね。じゃあ説明するわよ」

佐藤は他の皆に視線を向け、強く頷いた。

哀「“ APTX4869 ”のアポとはアポトーシス…つまりプログラム細胞死の事…  
そう…細胞は自らを殺す機構を持っていて、それを抑制す………」

パン！

哀「…っ…！？」

APT X4869の説明を遮り、哀の頬を蘭が平手打ちした。かなり強かったのだろう。その音は廊下中に響き渡った。

蘭のその思わぬ行動に一同は驚愕している。

蘭の頬を伝う、止まることのない涙。

これは間違いなく悲しみから来ているものじゃない…怒りから来ているものだ。

今までに見たことのない、恐ろしい形相をしている。

そして蘭は震える声で叫んだ。

蘭「もうやめて！そんなこと聞いてもなんの意味もないじゃない！何にも解決しないじゃない！」

園子「蘭？」

―いつもの蘭じゃない…―

園子はそう感じた。嫌な胸騒ぎがする…。

蘭「新一は死んだんだよ！？もういないんだよ！？

APTXだかなんだか知らないけど…わけわかんないよ…

…どうしてそんな薬のせいで新一が死ななきゃ行けないの？

どうしてそんな薬のせいで私達の幸せを邪魔されなきゃいけないの？」

哀「ごめんなさい…」

蘭「謝らないで！謝っても新一は帰って来ない！なのに…今さら何よ！」

小五郎「蘭。落ち着くんだ。」

ポンポンと蘭の肩を軽く叩き、微笑みながら小五郎は言った。

だが、蘭は小五郎の手を強引に払いのけた。

蘭「…ごめん…ちょっと用があるから…あとは好きにして…じゃあ…」

それだけを残すと、蘭は走り出した。

目暮「おい蘭君！用ってなんだね？」

小五郎「警部殿。今は諦めましょう…」

小五郎は蘭のあとを追いかけようとした目暮警部を制し、ゆっくりと首を左右に振りながら、ひ弱な声でそう呟いた。

皆はずっとその場で俯き、なかなか動こうとしなかった。

やけに静かな沈黙が流れる。

だが、皆の心中は騒然としていた。

~~~~~  
蘭~~~~~

“用がある”と嘘をついて抜け出してきた病院。宛てもなく、私はただひたすら走りつづけた。そして人気のない路地裏にたどり着き、そこに座り込むように膝をついた。

もう頭の中は混乱しきっている。

新一の死。

新一の幼児化とその正体。

その経緯。

組織の真相。

哀の正体。

どれも目を逸らしたいほど、私にとって辛いものだった。

だから…無駄に“APT X 4869の説明”をされて、もう頭の混乱は抑え切れず我慢が出来なくなって、とうとう哀ちゃんに平手打ちしてしまった。

さすがに酷いことしちゃったかな？

でも……………

どうして？

どうして博士も哀ちゃんも新一自身も、私に何も教えてくれなかったの？どうして黙っていたの？

こんなに近くにいたのに…

空を見上げながら、聞いても答えは返ってくるはずのない問いをずっと、誰にともなく投げ掛けていた。

だけど…それが何だか無性に悲しくなった。

しばらく空を見上げていると、いつきに雲行きが怪しくなった。
灰色の空。物悲しい色。絶望に包まれたような色。
まるで蘭の気持ちを代弁しているかのようなだった。

そしてついにその灰色の空は、一粒の雫を悲しく落とした。

その雫は蘭の乾いた頬に冷たく伝う。まるで涙のように…静かにそ
っと、綺麗に頬を濡らした。

7・哀悼〜偽りのない真実〜（後書き）

蘭はどうなっちゃうのか…？

次回もよろしく願います

8・回想く頼れる人物は？（前書き）

ちよーつと蘭ちゃんらしくないところがあります。

苦手な方…は、backして下さい。

今回、正直言ってもいい…は言い過ぎかな？…あんまり重要な話ではありません。

青子と快斗は蘭達とは知り合い、という設定にします。

8・回想く頼れる人物は？

何度も蘇るあのシーン。新一が私に約束してくれた…

あの時…――

「新一「ああ。もう俺はどこにもいかねえよ。これからはずっと一緒だ。」

蘭「ホント！良かった。」

絶対だよ。もうどこにもいかないよね？ずっと一緒だよ、私達。」

新一「当たり前だろ。もうどこにもいかないよ。お前を絶対幸せに
してやつから、心配すんな。」

蘭「本当に？」

新一「本当だ。蘭を置いていなくなったりしねえよ。約束する。だから安心しろ！」

蘭「約束破らないでよ。」

新一「ああ。」

そう約束したあと、私達はキスを交わした。お互いの気持ちに確信を持ったために…

でも…実際は違った。

あの約束は簡単に裏切られてしまった。

新一は嘘をついた…

——ああ。もう俺はどこにもいかねえよ。これからはずっと一緒だ。

…嘘…

——当たり前だろ。もうどこにもいかないよ。お前を絶対幸せにしてやつから、心配すんな。

…これも嘘。新一は私の前からもう二度と戻れないところへ姿を消した。私を幸せにしてくれなかった…

——本当だ。蘭を置いていなくなったりしねえよ。約束する。だから安心しろ！

…っ…なによ…全部嘘じゃない。新一は約束を破った。私を裏切った！

あれだけ念を押して約束したのに…

幼馴染みなんていう言葉に騙されて、勝手に一番近い存在だと…信
頼をおける人物だと…誤解していた…

信じなければよかった。

約束なんてしなきゃよかった。

新一なんて戻って来なかったらよかった。

新一なんて好きにならなければよかった。

新一に…会わなければよかった。

新一なんて……この世に存在しなければよかった。

…そうよ…新一に会いさえしなければ…新一がこの世に存在しなかったら…私は今頃違う人と恋人になって幸せな人生を送ってたはず…なのに…それを…新一の…所為で…

私の人生が狂ったのは新一の所為。
私がこんな辛い思いしなきゃならないのは全て新一の所為。

どろろー！

どうしてよ！？

どうして私がこんな辛い思いしなきゃいけないの！？

散々私を待たせて、挙げ句の果てには、私を裏切って、新一はいつからそんな薄情者になったの！？

返してよ！私の人生を…っ…返してよ！

雨に打たれながら蘭は泣き崩れていた。

もうこうなつた以上、後戻りは出来ない。これが毛利蘭^{わたし}の残された人生。

新一のこと…忘れたほうがいいかな？

ううん…憎々しい相手のことなんか自然と忘れていくに違いない。

その灰色の空から落ちる雨粒^{なみだ}は、次第に勢いを失い、そして完全に止まった。

雲のすき間から太陽の光りが綺麗に差し込む。

その光は蘭を優しく包み込む。

蘭は深呼吸をし、気持ちを落ち着かせた。

服はびしょ濡れ。

どうしよう……

探偵事務所に帰るのはお父さんがいるからちょっと気まずいし……

もうお父さんも博士も哀ちゃんも少年探偵団も…それに関わる全ての人が信用できない。

まだ事情を知らない、服部平次、遠山和葉、黒羽快斗、中森青子を除いては…

和葉ちゃんや服部君の家に行くにはだいぶん遠いし…

仕方ない。女は女同士でつてことで青子ちゃんの家に行かせてもらおうかな。

蘭は携帯を取り出し“中森青子”に電話した。

8・回想く頼れる人物は？（後書き）

この小説では、平次と和葉は勿論、青子と快斗が出てきます。

青子と快斗大好きだ♪

勿論、“大好き”それだけの理由で出してるんじゃないやありませんよ。
まあ半分ぐらいはそれが理由だけど、ちゃんと意味あつて出してます。

では。次回もよろしくお願いしますm(_____)m

9 ・可能性がある限り…（前書き）

哀ちゃん視点だったり、小五郎視点だったり、ややこしくてすいませんm（――）m

誤字、脱字があるかもしれませんがよろしく願います。

今回、博士達の様子、です。どうぞ。

9 ・可能性がある限り…

くくく 阿笠邸くくく

阿笠邸には哀と博士は勿論、少年探偵団と園子と小五郎が集まって言った。

佐藤と高木は先程、「犯人は我々の手で…全力を尽くして必ず捕まえます。」と一言だけ残し、阿笠邸を出ていった。

私はショックが大きかったため、しばらくの間寝込んでしまった。

目を覚ますと歩美、光彦、元太が心配そうに私を覗き込んでいた。

歩美「哀ちゃん大丈夫？」

ゆっくり身体を起こし、まわりを見回す。

哀「…蘭さん…まだ帰って来てないの？」

私がそう言つと皆は黙り込んでしまった。

少しの沈黙が続いたあと、光彦が最初に口を開いた。

光彦「蘭さんは…あのまま帰って来てません。」

そう言う光彦は手を強く握りしめ、俯いていた。

哀「そう…私の所為で…こんなことになって…ごめんなさいね…」

歩美「ううん。哀ちゃんは何も悪くない。」

哀「…っ…でもっ…」

歩美「哀ちゃん！自分を責めちゃダメ！……私は…哀ちゃんの…身方…だからね？」

元太「そう…だぜ」

光彦「僕も…です」

子供達は哀しい笑みを浮かべながら、そう言ってくれた。

でも…何か…しっくりこない…
心の中に…小さな蟠りがある…

園子「そっね…」

一同「!?!」

園子の言葉に一同は反応した。

園子「あれは蘭が悪かったのよ。でも…蘭もきつと辛かったんだと思う。許してあげてね？」

そう言う園子の表情はどこか切なそうだった。

哀「園子さん…」

園子「…蘭はたぶん私達全員に反感を持ってると思う…だけどこのままじゃ嫌なの。大切な親友として…悲しみから蘭を救ってあげたい…。そしていつも通りの生活を一緒に送りたいの…」

大切な親友に向けられた強い意思。優しい思いやり。温かい微笑み。

園子さんの気持ちは痛いほど良くわかる。
私もこのままじゃ嫌。

蘭さんに…辛い思いしてほしくない。

同じ気持ちを持った者として…

だから…

哀「私も…出来る限りのことはする…」

今の私は無力かもしれない…

…だけど…可能性はあるはずだから…

不可能じゃないこと…努力次第でいつかは成功を生み出せるはず…

まだまだ…不安だらけだけど…

小五郎「ふん…甘いな…」

一同「えっ？」

小五郎「蘭はな…新一に一途だったんだ…不思議なくらいに…。その気持ちはもう蘭の中に固定されていた。どんな衝撃をあたえても微動だにしなかった…それが今、砕け散った。抑えの効かない、耐え切れない感情おもさによって…蘭を襲ったそんな空前絶後の感情に…お前らが勝てるとも思ってたのか…」

小五郎は深いため息をつき、博士がいれたコーヒーを一口飲んだ。

園子「そ…んな…の…」

小五郎「俺達がどんなに頑張っても…解決出来ないんだよ…」

園子「そんなの…そんなの、わかんないじゃない!!!!」

園子はテーブルを思い切り叩き、そう叫んだ。

園子「勝手に決めないでよ!!!!証拠はどこ?」

小五郎「えっ」

園子「解決出来ないっていう証拠はどこにあるの？」

小五郎「そ…それは…」

問い詰められた小五郎は何も言い返せない。

証拠とかそんな物、存在するわけないのだから…。

ただ勝手に「解決出来ない」と決めつけていた…諦めていた。

園子「ないでしょ？あるわけないよね？だったら…証拠もないのにいい加減なこと言わないで！！！」

泣きながら必死に叫ぶ園子。

どれだけ蘭を大切に思っているのかが、一目瞭然だ。

強い友情で結ばれた二人。園子^{こいつ}になら…出来るかもしれない。
蘭の心を…取り戻せるかもしれない。

園子「無理だつて最初から諦めてたら、本当に何も出来ないんだよ？出来るかもしれないことも…出来なくなっちゃうんだよ！？可能性があるなら…それを信じた方が望んだ物に…未来に…近づくことができる…私はそう思うわ。」

——っ！？………確かに、こいつの言う通りだ。

…自分の方が人生をたくさん経験しているというのに…まだまだ未熟なこいつに、こんな大切な事に気づかされるなんて…。まったくくだ。

園子「おじさまは助けたいと思わないの！？自分の娘を…苦境から救い出してあげたいと思わないの！？幸せにしてあげたいと思わないの！？」

あんた探偵でしょ！！探偵わね、最後まで可能性を信じて、突っ走らなきゃいけないのよ！！その人のために！！

卓越した頭脳を持つていだけが探偵じゃないわ！…最後の最後まで可能性を信じ抜き、行動出来て、それでこそ探偵なのよ！！」

いつもは能天気、楽天家な園子だが、いざという時、しっかりしている。これだけのことを言えるのだ。高校生とは思えないほどに…精神は大人なんだ。

園子の言っていること全てが小五郎の身に、不器用だけど確実に染みた。

小五郎「……………わかった……………お前を信じるよ……………」

園子「おじさま…」

園子は笑顔を取り戻した。

小五郎「その代わり、蘭のこと大半はお前に任せませ。」

園子「うん…蘭のことは私に任せて！」

事態は丸く収まったかのように見えたが、そう簡単には終わらなかった。

蘭はもう…すでに崩れ始めている。

園子達に、少しずつ不安の渦が近づいている。

そんなことを知らずに、窮地に追いやられた蘭のため、可能性が有る限り、それを目指していた。

9・可能性がある限り…（後書き）

とりあえず園子と哀ちゃんと小五郎は大丈夫。とりあえず、ね？…。

少年探偵団はどうなんでしょうか？たぶん…大丈夫です。

話がなかなか動きませんね。すいませんm（――）m

次回は青子登場かな？

次回もよろしくお願いします。

10・ただ…今はそれだけで…（前書き）

青子登場。 快斗はまだ登場しません。

前にも一度言いましたが、青子達は蘭達と知り合い、という設定です。

10・ただ…今はそれだけで…

~~~~中森家~~~~

青子「はい蘭ちゃん…服びしょ濡れでしょ？青子の服貸してあげる。

」

蘭「ありがとう…」

先程降った雨で体が冷え、震えている蘭に、青子は着替えの服を手渡した。

そして蘭が着替え終わると、今度は温かいココアを蘭に差し出した。

青子「お父さん今仕事でいないから、ゆっくりしてていいよ」

優しくそう言う青子に、蘭は安心し、自然と笑みをこぼしていた。

そしてココアを一口飲むと一息ついた。  
温かい。すごく居心地が良かった。

青子「…何があったか話してくれる？青子でよかったですら力になるよ。」

少し戸惑いながらも、そう言ってくれた青子ちゃんのその優しさに、  
少し胸が苦しくなった…

…青子ちゃんになら、この気持ち、わかってもらえるかな…

私は全て話すと決心し、ゆっくりと口を開いた。

蘭「実は…ね…つい最近新一が帰って来たの…」

青子「えっ？本当？良かったじゃない！」

それなのにどうして蘭の表情が暗いのか、青子には理解出来なかった。

蘭「……嬉しく…なんか…ないよ…」

青子「どうして？」

蘭「だって新一…もういないんだもん…」

青子「まさか…浮気!？」

テーブルを強く叩き、勢いよくソファーから立ち上がった青子に、  
蘭はゆっくりと首を左右に振った。

青子はその蘭の仕草を見て「じゃあどうして？」と再び問うと、  
ファアーに座り直した。

蘭「…実は…もう…この世にはいないの…」。  
守れもしない約束だけして…偽りだらけの姿だけ残して…新一は…  
コナン君は…永遠にかえらぬ人と…なってしまったの…」

青子「えっ…」

以外な答えに青子は何も言うことが出来なかった。

…江戸川コナン「工藤新一…」

そして…

…その人物の…“死”…

あまりにも衝撃的すぎた。

しばらくの間、沈黙が続いた。

その沈黙を最初に破ったのは…青子だった。

青子「探偵事務所に…戻らなくて…いいの？」

蘭「うん…いいの…誰も私のことをわかってくれないから…。それに…私、皆に酷いこと言っちゃったから…でも後悔はしてないよ…ってそれは流石にないか…でも、もう誰も信じられなくなったの。何だろ？もう新一のことも…思い出たくない…たぶん、憎しみし

か…残ってないから…」

今にも泣き出しそうな、切ない表情でそう言う蘭が哀れで、見ていられなかった。

…このままではいけない、蘭を闇から救い出してあげたい。でも今は出来るだけ蘭ちゃんの身方をしてあげたい、という気持ちの方が大きかった。

別に、皆を敵にまわしてるわけじゃないよ。皆はたぶん、蘭ちゃんのために…助け出そうと努力してくれていると思う。でも今の蘭ちゃんにそんなこと言っても信じてくれないだろう。蘭ちゃんは皆のこと敵視してるだろうし、第一、確証なんてどこにもない…

だから、青子、出来るだけ蘭ちゃんの前では身方としていてあげる。“ふり”としてかもしれないけど…でも、気持ちはちゃんとあるんだよ。大切な親友として。  
蘭ちゃんの支えになつてあげたい…。

青子「蘭ちゃん…その気持ち、何となくだけど、わかるような気がする…だから…青子のことは信じて？…青子は蘭ちゃんの身方だから…ね？」

優しく微笑みかける青子に、蘭は涙を流しながら、抱き着いた。

蘭「ありがとう…青子ちゃん…本当に…ありがとう…」

慰められるような体温。それがさらに涙を誘う。

―全てを包み込んでくれるような青子ちゃんの優しさに、今はただ甘えたかった。―

—そんな蘭ちゃんを、今はただ支えてあげたかった。—

今はただ…それだけで…心のうちを覆い隠すことが…出来た…

だけど…お互い、心のうちを覆い隠しているからこそ…不確かな意思で理解し合っているからこそ、…歯車はまだ、きちんと噛み合っていないかったのだ。

そのことに二人は気づかず、ただ、今心の中にある一つの意味だけが、至福を導く、たった一つの最善策だと思い込んでいた。

“逆回転してしまうかもしれない”なんていう不安は、今の二人にはなかったのだ。

10・ただ…今はそれだけで…（後書き）

次回もよろしくお願いします。

## 11・親友達の思い（前書き）

サブタイトル思いつかない…（・|・;）

和葉登場。服部はまだ登場しません。

## 11・親友達の思い

園子「蘭…どこいったんだよ…」

新一が亡くなり、蘭が姿を消してからもう1週間が経つ。

園子達はこの1週間、蘭の行方をずっと追っていたのだが、いまだ見つからない。

それもそのはず。青子が蘭自身からの頼みで、蘭を匿っていることを伏せているからだ。勿論、同居している中森銀三にも秘密にしている。

園子は心配で心配で仕方なかった。

蘭は今どうしているのだろうか。

事件に巻き込まれていないだろうか。

…ちゃんと生きているのだろうか。

いくら電話をしても、蘭が出てくれる訳もなく、日々重なっていく不安な気持ち。

せめて生死だけでも確認して、一先ず安心したい。

でないと、私自身が耐え切れなくなってしまうのも時間の問題。

こんな私に…蘭を救うこのなんて出来るのかな？

新一君なら…蘭を確実に闇から救うことが出来るのに…

あの時、私が二人を庇って撃たれていれば…体が縮むだけで済んでいたら…新一君は死ぬこともなく、二人は永遠の幸せを掴むことが出来ていただろうに…

なんで撃たれたのが私じゃなく、新一君だったんだろう。

なんであのタイミングで新一君の体が縮んだんだろう。

どうして新一君が死ななきゃいけないのだろう。

どうして二人の幸せを邪魔されなくちゃいけないのだろう。

私の胸の中で後悔の波が大きく渦巻いた。

蘭

青子「ただいま…蘭ちゃん…」

街が夕日でオレンジ色に染まる時刻、青子が学校から帰ってきた。

蘭は勿論、休学している。

青子「新一君のこと、快斗に話しておいたよ…」

蘭「ありがとう。私も和葉ちゃんと服部君に話したよ。明日、二人とも東京こうちに来るって。」

無理矢理笑顔をつくって、そう言う蘭の表情に、青子は心を痛めた。

青子「……どうして蘭ちゃんがこんな辛い思いしなくちゃならないんだろうね……。ごめんね……力になれなくて……無力で……何も出来なくて……」

蘭「……うつん……そんなことないよ。……それに……青子ちゃんの所為じゃないから……こうなったのは……全て新一あいつの所為だから……」

憎しみの籠もった口調。ただどこか悲しげな表情。

蘭の気持ちは、青子にはなかなか検討がつかなかった。

愛する相手への気持ちは、憎しみへと変わり、でもそれは決して純一で単純なものではなく、複雑に入り混じったものであり、厄介な気持ち（負担）となっている。

それは大切な存在を失うことを経験した人でしか、理解出来ないかもしれない。

でも…何とかして、蘭ちゃんの負担を減らしてあげたい。

…偽りでも何でもいいから、今の蘭ちゃんを理解してあげたい。

その一心がどんな波乱を呼ぶのか、まったく考えもせず、ただひたすらそう思っていた。

~~~~~翌日~~~~~

ピンポン。

朝早く、和葉は蘭の元に駆けつけた。

青子「和葉ちゃん。あがつて」

和葉「お邪魔します」

青子「蘭ちゃん、和葉ちゃんが来たよ」

寝起きでなのか、寝不足だからなのか、ボーっとしている蘭に和葉が駆け寄った。

和葉「蘭ちゃん、大丈夫？」

蘭「私のために、わざわざ大阪から来てくれてありがとうね。それより…服部君は？」

和葉「ああ。平次やつたら、先にホテルに向かって、きっとベッドの上で熟睡してんで。昨日は工藤君の死を聞かされて、なかなか寝付けなかったみたいやから。」

蘭「そう…」

青子「和葉ちゃん。私、学校行って来るから…蘭ちゃんのこと頼むね。」

そう言つと青子は、そそくさと家を出ていった。

和葉「蘭ちゃん顔色悪いで。もうちょっと寝とき。」

蘭「ありがとう…」

蘭はゆっくりと瞼を閉じ、すぐに眠りについた。

~~~~~

蘭「…うつ…うつ…」

苦しそうに呼吸をし、うなされている蘭を和葉が心配そうに覗き込んでいる。

そして蘭は正午が過ぎた頃、目を覚ました。

和葉「蘭ちゃん大丈夫？めっちゃうなされとったで」

蘭「え…嫌…ちょっと嫌な夢見ちゃって…全然大丈夫だよ」

明らかに無理している。

そう思った和葉は蘭に言った。

和葉「なあ…気晴らしに近くの喫茶店にでもいかへん？」

蘭「えっ？別に…いいけど」

和葉「じゃあ行こ？」

和葉は蘭の手を掴むとさっそく、近くの喫茶店に向かった。

親友の手の温もりは、まるであの“嫌な夢”がなかったかのような  
気分になんてくれた。

11・親友達の思い（後書き）

次回もよろしく願います

## 12・変わってしまった親友（前書き）

蘭ちゃんのキャラがちょっと崩壊気味。…っていつか完全に崩壊しちゃってる？

不満のある方はbackをすすめます。

## 12・変わってしまった親友

~~~~喫茶店~~~~

和葉「ちよつと気持ちスツキリした？」

蘭「うん……」

和葉「こんな時に悪いんやけど……さっき寝てる時、うなされとったやろ？なんか嫌な夢でも見たん？」

少し戸惑いがちに和葉は蘭に問う。

蘭「まあ……ね……。実は、夢の中に……新^{あいつ}一が出て来たの。今まであいつと過ごして来た日々が……何度も、何度もリピートされて……そんな

な嫌な夢…」

和葉「辛いんやね…。でもそれってまだ蘭ちゃんが工藤君のこと想ってるからやろ？別に嫌な夢でもあらへんやん…」

蘭「…ちっ…違う！想ってなんかない！あんな奴のことなんか想って…なんかない！」

いきなり声を荒げた蘭に和葉は驚いた。

蘭はしばらくの間、新一の愚痴を吐いていた。

その顔は真剣で、怒りに満ちていた。

だけど…蘭の言っていること全て本音じゃない、間違ったものだと思った。

和葉はしばらくの間、眉間にシワを寄せて黙って聞いていたが、とうとう耐え切れなくなり、蘭の言葉を途中で遮った。

和葉「いい加減にしてや！蘭ちゃん。私誰も工藤君の愚痴聞かせてなんて言っていないで！」

まわりの客の視線がいつきにこちらへ向いた。

そんなことも気にせず、和葉は言い続ける。

和葉「蘭ちゃん、本当はそんなこと思っていないんやろ？本当は工藤

君のこと大好きなんやろ？そやのに…そんな蘭ちゃんの口から工藤君の愚痴なんか聞きたない！」

蘭「思ってるから…言ってるんじゃない…」

和葉「何言ってるの！夢の中に何回も工藤君が出てくるっちゅうことは、好きやって想いがあるからやろ！？」

蘭「でも…あいつが出てくるから…私はもっと辛い思いしてるんだよ？そんな人物を、前のように好きでいられると思ってるの！？」

和葉「蘭ちゃん…。」

蘭「そんなの出来ないよ！」

蘭の頬に涙が伝う。

蘭「忘れようとしたのに…もう二度と思い出さないようにしてたのに…何度も思い出されて、苦しめられて…」

和葉は一息つき、声のトーンをおとして言った。

和葉「…死んだ人の思い出…辛いかもしれん…でもな…大切な思い出には変わらないんや…。だから、死んだ人の思い出は綺麗に心の中にしまっとくんや…最高の思い出にするために…」

蘭「綺麗になんて…最高になんて…出来ない…何があっても…」

和葉「何諦めてんのん！最後まで粘り強く信じなあかん！何でそんな弱気なん？蘭ちゃんらしくないで！？」

蘭「そうかもしれない。だけどそれは、私自身が変わってしまったから…！」

和葉「……っ………！？」

蘭「今の私はあいつが好きだった頃の私じゃない。今はね…ただあいつ対して憎しみしかない、恨みしかない…あの時とは違う毛利蘭なの…！」

和葉「……っ………そんなん信じへん！蘭ちゃんが変わってしもたなんて…絶対信じたくない！」

蘭「女はね…変わるのよ…成り行きによっては…天使から、悪魔にもね！」

今の蘭はまったく別人だ。

声も顔も心も…何もかもあの時の蘭とは違う。

信じられない…

誰にでも温厚な蘭ちゃんが…

こんなにも変わってしまうなんて…

何で…？

和葉「何でなん…？ 蘭ちゃんが変わってしまうなんて…何でなの？ 私にはわからん！」

蘭「和葉ちゃんは何にもわかってくれないんだね…。だったらもういい。…私なんか…関わらないで！」

和葉「もう蘭ちゃんなんて知らん！自分で…何とかすんねんで！私はどうなっても知らんからな！」

和葉は飲みかけの紅茶をいつきに飲み干すと、その場から走り去った。

蘭「…私の気持ちなんて…和葉ちゃんになんかに…わからない…」

蘭はそのまま喫茶店で時間をつぶした。

青子が帰って来るまで…

自分の気持ちを唯一解ってくれていると信じている…

理解者が帰って来るまで…。

~~~~~  
和葉~~~~~

和葉は自分が泊まるホテルに向かってひたすら走り続けた。

何で？私はただ蘭ちゃんを助けてあげたくて、力になってあげたくて、東京まで来たのに…逆に迷惑かけてしもた…

でも…蘭ちゃんの言ってることが理解できへん。信じられへん。

蘭ちゃんが変わってしもたなんて…嘘や。

嘘や嘘や嘘や！

涙を流しながら勢いを止めることもなく走り続けたが…。

和葉「…っ…キャア！」

途中の曲がり角で、誰かにぶつかってしまい、後ろ向きに倒れ込んでしまった。

「大丈夫か？」

和葉「す、すいません」

和葉は涙を見られなくて、慌てて立ち去ろうとしたが、体が重く感じてなかなか立ち上がれなかった。

「手、貸すで？」

どこか落ち着く声に、差し出された手。  
和葉は自然とその人の手に掴まった。

和葉「えっ？」

この感覚。温かさ。

もしかして…

和葉「平次！？」

「えっ？和葉！？」

そう、ぶつかった相手は服部平次だった。

平次「何してんねん？お前あの探偵事務所の姉ちゃんどこ行くんや  
なかったんか？」

和葉「そ、そやけど…平次こそなんでここに…」

平次「お前帰って来んの遅かったから探してたんや」

和葉「あっ…」

気づけばもう太陽は沈んでおり、あたりは薄暗い。

おまけに和葉はホテルまでの道のりを遠回りしていた。

服部「ん？泣いてるんか？」

和葉「いや…これは…」

服部「ほい。これで涙拭えや。お前は笑顔のほづが似合うねんから。」

白い歯を見せて笑う平次に一瞬、ドキッとした。

和葉「平次…ありがとう…」

差し出されたハンカチで涙を拭った。

平次の臭い…。

気持ちがすごく落ち着いた。

それと共に、顔が熱くなるのがわかった。

溢れる平次への想い。

和葉「平次〜！」

和葉は服部に抱き着いた。

服部は一瞬驚いたが、そのまま和葉を優しく抱き寄せた。

## 12・変わってしまった親友（後書き）

何かこの頃、色んな登場人物が叫んでるような…。

「女は変わるわよ…成り行きによつては…天使から悪魔にもね！」  
↑どっかの犯人がすごい形相で言つてたセリフです。（あの時はちよつとビックリしたなあ…白鳥刑事が可哀相だった…）

一応言っておきますが、蘭はあんな恐ろしい顔してませんよ…（^  
^ ; ）

つていうか蘭は絶対そんなセリフ言わないですよね…

崩壊してる……すいません。

まあ「崩壊して行く蘭の行き先は？」が話の軸の一つですから…許して下さい。

次回もよろしくお願いします

### 13・突然の出来事（前書き）

快斗登場です。ちょっとただけけど…

今回短いです。

学校始まってから執筆が大変…。

更新遅くなってしまうかもしれませんが、ご了承ください。

あと、小説タイトル少しだけ変えました。

### 13・突然の出来事

喫茶店で時間を潰していた蘭に、青子から電話がかかってきた。

青子「あ、蘭ちゃん？今日遅くなると思っから…お風呂とか晩御飯とかは先に済ませてて…」

蘭「うん…ありがとう…」

蘭は電話を切ると深いため息をついた。

蘭「仕方ない…帰ろ…」

~~~~黒羽家~~~~

青子は学校帰り、快斗の家によっていた。

快斗「何だよ？話つて？…」

青子「実はね…新一君…亡くなっちゃったみたいなの…」

快斗「なっ！？名探偵が…」

青子の口から出された言葉に快斗は驚愕した。

青子「それと新一君は…コナン君だったみたい…」

快斗「…………それは知ってたよ……………」

青子「ど、どうして？」

快斗「怪盗キッドだった時に…色々あってな…」

快斗は追っていた組織が壊滅したため、もうこれ以上活動する意味はなく、自分は『怪盗キッド』だったと青子に言い、『怪盗キッド』から引退した。

だから今はマジック好きの普通の高校生である。

青子「今更だけど…お疲れ様だね…」

快斗「ああ、ありがと…。それより蘭ちゃんの方は大丈夫なのか？」

青子は静かに首を横に振り、小さな声で言った。

青子「一応今は青子ん家に寝泊まりしてるけど……
色々大変だよ…今じゃ…新一君のこと、すごく恨んでるみたい…前
と変わっちゃった…」

快斗「そう…か…」

快斗は少し俯き、胸を痛めた。

あんなに新一が好きだった蘭ちゃんが…

女は変わっちまうのかな？

青子「あつても青子は大丈夫！絶対変わったりしないからね？」

快斗の不安な気持ちを察したのか、青子は慌てて笑顔でそう言った。

そんな青子を見て、快斗は表情を少し緩め、悪戯っぽい笑顔をつくった。

快斗「わかってるって！アホ子♪」

青子「な、何よ！バ快斗！」

こんなことを言い合っているが、二人は本当にそうであってほしいと本気で思っていた。

そうこうしているうちに、すっかり夜遅くになってしまい、慌てて帰宅したのだが…もう深夜の1時をまわっているというのに、蘭のいる青子の部屋は明かりがついていた。

そして、静まり返った廊下に響く声。

青子はそつと部屋の戸を開けると、そこである光景を目撃した。

青子「どうしたの…蘭ちゃん…」

頭を抱え、座り込む蘭に青子は目の色を変えて駆け寄った。

蘭「わかんない…急に頭が痛くなって…っ…」

青子「病院行った方がいいかも。青子、救急車呼ぶね。」

—
…病院…

—
…救急車…

蘭の頭の中で、その二つの単語が引っ掛かった。

込み上げてくる感情。

それは恨み。

そして自分への怒り。

どうしてなのかは解らないけど…

蘭「無駄よ…呼ばなくて…いい…。」

青子「でも…」

蘭「お願いだから…呼ばないで」

体を震わせ、そう必死に言う蘭を見て、さすがに青子も手が止まった。

青子「わかった…。でも、酷くなったらちゃんと青子に言ってね？」

青子は蘭から目を逸らすと、その視線の先にはあるものがあった。

青子「これ…」

それは、ビリビリに破られた今日の新聞。

そしてそこには未だ騒がれている故人、新一がうつっていた。

青子「深いわけは聞かないよ…でもこれ…」

蘭「……………忘れるため……………自分の気持ちに早く区切りをつけたかったから……………」

青子「そう…」

複雑な気持ちだった。

それから2週間くらいの間、頭痛が続いたが、次第におさまり、回復へと向かった。

回復したのは良かったけど…引っ掛かる…

どうして蘭ちゃんはあの時、いきなり頭痛が仕出したのか…

かなり苦しそうだったし…

どうして…

原因はいつたい…

13・突然の出来事（後書き）

蘭の頭痛の原因がわかるのは、もっと先です。

次回もよろしく願います

14・問いと答え（前書き）

話がなかなか進まない…

すみせんm（—）m

14・問いと答え

和葉「ハア……………」

和葉は深くため息をつき、窓の外を眺める。

最近こればかり繰り返している。

―もう蘭ちゃんのことなんか知らん！後は自分でなんとかすんねんで！―

口ではああ言ったものの、やっぱり蘭ちゃんのことを気になって気になってしょうがない。

正直、あの時は言い過ぎた。

もつと蘭ちゃんのお持ち考えたればよかった。

でも今更遅いよな…

平次「どないしたんや？和葉…ため息ばっかつきよって…」

平次に相談するべき？

でも、迷惑かけるのいややし…。

平次「……………和葉……………何か悩んでることあんねやろ？」

平次はまるで私の心中を見透かしたかのように、聞いてきた。

あの鈍感な平次が…

和葉「何で…わかったん？」

平次「アホ………幼馴染みの関係、なめとつたらアカンで！
和葉のことくらい、すぐわかんねんから。正直に言え…」

めっちゃ心強い言葉やけど…

でも…

平次「何や…言いづらいんか？」

和葉「……………」

平次「せやったら…大まかでええから…。一人で背負い込むことだけはするな…」

真剣で、でもどこか優しげで…

本気で私のことを心配してくれているのだと、よくわかる。

大まかでええ…

だっ たら相談してみよう…

相談しないよりは、マシだろう。

和葉「……………あんな……………平次やっ たらどないする?」

平次「何をや?」

和葉「例えば…天涯孤独で心に深い傷を負った女の子がおって…助
けたい思うて行動しても、その子は…いつまでたっても素直になら
んと、そのことを否定すんねん。

そんなこと、本当は絶対思っ てないくせに、しつこく否定し続けて、
それで自分はいそその子にきつい一言を言っ てしまっ ……本当は助け
たい思っ てるのに、反対に傷っ けてしまっ ……

それから気まづい関係になっ て…
それでも気になる、どうしても助けてあげたい…。けど、その子を

傷つけといて、今更許してもらえないわけもなく、出来るわけもなく…

こんな時、平次やったらどないする？」

平次「何や？やけにリアルな話やな…」

和葉「なあ、お願いや。平次…私わからんねん。重大なことやねん。この正しい答えを…教えて…」

真剣な表情でそう問ってくる愛しい彼女に、服部は、遠回りだけれど相談してくれたことに安堵し、フツと穏やかな笑みを浮かべた。

平次「なあ和葉…俺はその問いに正しい答えなんてないと思うねん…

ただ、後悔しんように、お前が思うままにやったらええ…

失敗したら、またやり直せばええねんから…」

和葉「平次…」

……せやね

何不安がってんねやろ…

平次の言う通り、思うようにやったら…ええねん。

なにも戸惑うことなんかあらへん。

悩むことなんかあらへん…

和葉は納得すると、とびきりの笑顔を平次に向けて言った。

和葉「ありがとな！平次！やっぱり西の服部平次って言われてるだけあって、ホンマ名探偵やな！今の平次、めっちゃかっこよかったで！」

彼女の可愛らしい笑顔に、平次は一瞬、ドキツとし、顔を赤らめてそっぽを向いた。

平次「あ…あのさ…和」

服部は何かを言いかけたが、それは和葉の言葉によって遮られた。

和葉「ほな！私行くとこあるから！待っててな！」

そう言つて元気よくホテルから出ていった和葉の背中では、小さいけれど、逞しさが感じられた。

平次「…まあ…いつか…」

服部は一人残つた部屋でポツリと呟いた。

和葉が何しに行きよつたかは…だいたい予想がつく。

しっかりしてこいや…

俺はちゃんと待ってんで…

…和葉…

14・問いと答え（後書き）

次回もよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0105v/>

行き先はひとつ

2011年11月11日10時52分発行